

第 33 回 浅野峰彦さん

チャイナペインティング講師（元陶磁器上絵付け職人）

平成 23 年度文化庁「文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」として作成した『界限創世』（名古屋文化遺産活用実行委員会発行）12, 13 頁「貼ることと描くこと」より絵師・浅野峰彦さんを紹介いたします。



『界限創世』12 頁

貼ることと描くこと

職人……。そう呼ぶに相応しい静かな語り口が印象的だった。そして、職人として、長く、一つの技を磨いてきた人ならではの強い意志を感じる。

今日では、転写の技術が進歩し、製品の仕上がりは均質化した。画一的で安価なものができるようになることを進歩と捉えれば、技術的には、確実に「進歩」したと言える。だが、浅野さんは、アメリカへ輸出するランプのボディの絵付けを長く続けてきた人で、そうした転写の仕事には興味がわかなかったようだ。現役を退いて10年になる。

「職人は仕事が無くなれば辞めざるを得ないのです。名古屋陶磁では多分、私が一番最後まで絵付けの仕事をしていたのかもしれない。」

「誰でも同じようにできる仕事」には、職人の技を披露する瞬間がない。恐らく、描くという行為は、同じように見えても、描く人によって、微妙な風合いが異なるのであろう……。その微妙な差異に、職人のプライドが垣間見えるようでもある。

陶磁器に描くことは、フラットなキャンパスに絵を描くのではない難しさがある。素地との相性

『界限創世』12頁

ことなど、熟練の技が要求されよう。絵の具を薄く描いていくことができるか……。絵の具を溶くオイルにも職人は自分のやり方があったという。そして何より、納期という時間の制限がある中での仕事が「職人」なのである。自分自身の納得は全く別な問題である。その気持ちの中で折り合いを付けるのも難しい。

アメリカ輸出向けに作られた大きな花瓶は、一日に6本ほどの絵付けをしていたらしい。緊張感を持って集中する“職人の時間”である。少しの油断がすべてを台無しにしてしまう。その中で、仕上げるのが職人の技なのであろう。

「一人前の絵付け職人として仕事ができるようになるまでに10年はかかったでしょう。数を描かないと上達はありません。そして、朝から晩まで、描いていけばいいようなものでもないんです。陶磁に描くことができる人は居なくなるんじゃないかな。」

今日では、為替環境が悪くなり、輸出品は中国等

で代替されているようであるが、日本人ならではの精細な筆使いが、経済環境の影響のみで消えていくのは、忍びない。

「自分のオリジナリティーのある花を描くというのは難しい。特に薔薇の花は。もしも、機会があるならば薔薇を描きたいですね」。その目の輝きは、今なお職人である。



浅野 峰彦

昭和8年生まれ。ノリタケを退社後、独学で絵付けを学び現在に至る。絵付けした商品はアメリカを中心に輸出、海外でも高い評価を得ている。キャリアは40年以上におよび、その作品は繊細なタッチとやさしい色使いが特長。アメリカンからヨーロッパアンまであらゆる技法に精通する。(写真は1997年頃自宅にて)



——お話のなかに登場したランプの絵付けのことなど、改めてお話をお聞きする機会がありましたので、ここに追記します。

ランプの見本は、毎年、春と秋に12点ほど作って、半分は注文が決まっていた。10ダースずつの注文で、そのうち一点は5~6千個も注文がきたものです。見本は、バイヤーが気に入った模様の布を持ってくるので、それを参考にして作っていました。バイヤーはアメリカのワイルドウッドという有名な会社で、瀬戸の安田(商社)さんからの注文でした。自分は描く専門で、直接仕事をもらうわけではないから、相棒(窯屋さん)の川谷さんから聞いた話です。川谷さんは松風陶器の番頭をやっていた人で、この人からいつも仕事をもらっていました。

一日に3本絵をつければ普通ですが、私は、7本は仕上げていました。ここに来たら、仕事があるという噂を聞きつけ、瀬戸から職人さんが何人ものぞきに來ましたが、私の仕事をみて、びっくりして帰っていきました。ランプの絵を描くのに、筆を50本~60本使っていましたから。予め2段に筆を描く順に並べておいて、端から順に一本ずつ取り変えて描いていました。

ワイルドウッドは、京都の平安神宮の横に日本のお店がありましたが、今でもあるのかな。中国に追いやられて、だんだん注文が減ってしまい、見本を作っても注文がくるのが、1点は10ダース、その他は30個程度になってしまいました。それでも、何とかやっていたのですが、最後には、その半分に注文を減らしてほしいと言われ、断るしかありませんでした。絵具を擦って用意するだけでも大変な手間ですから、半分の注文では、ただ同然の仕事になります。

私は、ずっと馬の毛の筆を使っていたのですが、今は手に入らなくなって、リスの毛の筆を使っています。馬の筆は、使い熟すのに時間がかかりますが、もちがいいです。金描きには、黒軸、赤軸を使っていました。北区にあった加藤さんの筆がよかったので、加藤さんが高齢で、「もう筆を作れない」と聞いたときに、たくさん購入しました。7, 8年前のことだったかな。

描き絵の仕事は、転写に代わってしまい、早くなくなってしまいました。遠藤陶器さんのあと、スボシさん、栄和さんの仕事をしました。手の込んだ絵ではなく、簡素化したマロンの花を描いていました。

現在は、上絵付け教室の講師をしています。平筆を使って描こうとする生徒さんはほとんどいません。とても残念です。平筆の筆遣いは難しいですから、みんな、丸筆を使った絵を好みます。

——最後に、当館展示室にて、昨年たくさん寄贈いただいた中部陶器(株)の精巧に手描きされたミニチュア作品 (Made in Occupied Japan 作品) をご覧になった感想は、感慨深いものでした。

小さいものはピンセットを使って描くのです。細かくて大変な仕事ですけど利点もあります。テーブルに数がたくさん乗るから、大量に仕事がこなせます。このような手描き作品をみて、職人さんたちのことを忍ぶと胸が詰まります。儲けていたならいいけど、夜中まで必死でやらないと生活できなかつたと思います。



Made in OCCUPIED JAPAN の手描き作品

(中部陶器株製)

* 「業界人のお話」 第 33 回 平成 27 年 3 月 27 日掲載